分岐し続ける物語

アルカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
分岐し続ける物語

【Ｎコード】
Ｎ８４５３Ｐ

【作者名】
アルカナ

【あらすじ】

全ての物語はここで始まり、この世界で分離し、この世界に繋がり、そしてこの物語で終わる。

全ての物語の始まり

それは夢なのか現実なのかわからない世界。
そこに８人？が円を描くように立っていた。
あるものは、仲間に裏切られて
あるものは、自分と同じ殺し屋に殺されて
あるものは、空を飛ぶ少女と女性に襲われて
あるものは、とあるビルの上から飛び降りて
あるものは、自らの病に侵されて
あるものは、只事件に巻き込まれて
あるものは、化け物に腕を引きちぎられて
あるものは、明日のために早く寝て
この空間に迷い込んでしまった。
それぞれ、ここがどこで目の前にいる「白い人型」はなんだ？と
考えていると

「こんにちは！「罪」を受け取ることを許される皆さん！！」

と上から声がした。

それぞれ人型をした八人は、上を見上げるとそこには、

「ムフフフ、これから貴方達が「物語」を大いに乱してくれるのだと思うと私軽くイってしまいそうです！」

ハゥ！と言っている少女が逆さまの状態で立っていた。そう「逆さま」で

「貴方達ははれて私、「邪神」アンリ・マユのお眼鏡にかなった人達です！」

パチパチパチパチ！

と自称「邪神」が拍手をしていると一人の人型が手を挙げた。

「はい、なんですか？「絶望（ジ・エンド）」さん」

『……「絶望」？……まぁいい、確か俺「　　」に居た筈だけど』

この時他の人型は空白の所でノイズが走った。

「ム？もしかして「絶望」さんはあの「　　」に居たかったんですか？」

『そうではないけど……』

「なら今は気にしないでください♪それにこの世界に出たら皆さん各々それぞれの形で目覚めますから♪」

『……分かった』

「あ、今のうちに質問はありますか？」

『なら僕も良いですか？』

「はい、なんですか？「強欲（グリード）」さん」

『……最初の人に「絶望」とか、僕に「強欲」とか言っていますがなんですか、それ？』

「あぁ、これは貴方達がここに来る切っ掛けみたいなものです♪」

そう言って自称「邪神」は、最初の人を指差すと、

「大切にしていた仲間に裏切られ、家族に捨てられ、全てを「失った」者。「絶望」」

次にさっき質問した人を指差し、

「生きたい、強くなりたいと「強く願った」者。「強欲」」

その次からは時計回りに、

「殺しに自らの「プライド」を持つ者。「傲慢（プライド）」」

「生まれながらに持つ弟の才能に「嫉む」者。「嫉妬(エンヴィー)」」

「飛び降りた間際に「何かを食したい」と思った者。「暴食(グラトニー)」」

「事件に巻き込まれるとわかっておりながら「何もしよう」としなかった者。「怠惰(スロウス)」」

「理不尽な化け物に殺されかけ「怒り」を発する者。「憤怒(ラース)」」

「自らの兄の為に「その身を売りながら」生活する者。「色欲(ラスト)」」

一人一人指を指していき最後に、

「それがお前らの「罪」だ！」

そう笑いながら言った。

『……「物語」を乱すとはどういう事だ？というより「物語」とはなんだ』

「憤怒」と呼ばれた存在がそう言うと邪神は、

「あぁ、「転生組」ならわかるけど「オリキャラ」や「絶望」さんは分かりませんね。「物語」とは「絶望」さん、「憤怒」さん、「嫉妬」さん、「色欲」さんが住んでいる「世界」を舞台にしたお話の事です。貴方達の居る世界は基本的に漫画やゲームといった架空の世界に作られたモノですがたまに貴方達みたいに「原作に存在しない」または「原作とは違う話しの流れ」を人はパラレルワールドとか並行世界とか呼んでいるのです。あぁ、あと転生者達からはイレギュラーともいわれてます」

と話しながら肩にかかっているポーチから少しだけ束になったカードを取り出した。

「さて、ここからは本題に入るね。このカードには「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ」に出てくるサーヴァントの性質(ランク)が描かれているんです。それぞれのカードは剣の騎士(セイバー)・弓の騎士(アーチャー)・槍の騎士(ランサー)・騎乗兵(ライダー)・魔術師(キャスター)・狂戦士(バーサーカー)・暗殺者(アサシン)そして復讐者(アヴェンジャー)の計八枚、つまり貴方達の分だけあるのですよ。このカードにはあなた達に与える「力」が入っています。それは目覚めて直ぐなのかそれとも人から人に渡りながら手に入れるのかは、それぞれの運命次第ね。それじゃ、カードを配りまーす！まずは「セイバー」からです！」

そう言って邪神はカードを一枚ぬくと、

「「セイバー」は「怠惰」さんです！」

と言いカードを「怠惰」に投げ渡した。「怠惰」がそのカードを受け取ると

「次は「アーチャー」です！「アーチャー」は「色欲」さんです！」

と言って「色欲」に投げ渡した。あとは、

「ランサー」は「憤怒」に

「ライダー」は「暴食」に

「キャスター」は「強欲」に

「バーサーカー」は「嫉妬」に

「アサシン」は「傲慢」に

そして「アヴェンジャー」は「絶望」に渡った。

「全員にカードが回りましたね？それでは説明に入ります。まずは貴方達にはクラスに応じた固有の技能（スキル）が与えられるのです。剣・弓・槍の三騎士には「対〇〇」といった対抗能力を、狂戦士には「狂化」という全ての力を上げる代わりに理性を狂わせる技能が与えられます！良い技能もあれば悪い技能もありますが其処のことは理解してくださいね。カードを頭に当てると貴方達に与えられる技能が確認できるんですよ、でもそれは最後にしてくださいね」

邪神がそう言うと今まさに頭にカードを当てようとした者達は渋々とカードを下した。

「それじゃあ、説明に戻りますね。貴方達には技能とは別に「罪」という特殊な能力を与えられます。まぁ、それもカードを額に当てるとわかるので確認してくださいね。それとこれが一番重要な事です！」

邪神の周りに突如光る八個の球体が現れ邪神の周りを飛び始めた。

「貴方達に「武器」を与えます！」

と邪神が言うと邪神の周りを飛んでいた球体が動きを止めてそれぞれ八人の存在に物凄い勢いで飛んできた。それぞれ回避行動を取ろうとしたらしいが体が動かずそのまま光の球体が体に直撃するとそ

の球体は体に入り込むように消えていった。

「皆さんに行き届きましたね。その光は貴方達の「武器」となるモノの道しるべになるでしょう。「武器」と言っても性質にあった武器しか提供しないのでそのつもりでいてください、その「武器」についてもカードを額に当てる事で分かるようになっています。そして最後に今から戻って貰う、または行ってもらう世界に貴方達と同じような「力」を持つ存在が現れます」

その言葉に今まで黙って聞いていた「嫉妬」が聞いた。

『それって僕を襲った人達の事ですか？』

「……それについてはＮＯとお答えします。「力」と言うのは今あなた達が持つカードを持っている者たちの事です。そのカードは一組八枚つまり一つの世界に「罪」を持たない「力」を持つ人間達「契約者」が七人いる事になります。「契約者」とは神と契約することでそのカードを手に入れる事ができるからです、神に呼び出される方法はいくつもありますがこれだけは言っておきます。必ずしも「敵」ではないと言う事を」

『……「敵」ではないだと？』

「はい、本来「契約者」とは抑止力なのですがその事を知らない「契約者」達は貴方達「罪」を持つ者「原罪者」達を「敵」と判断し襲ってくるかもしれません。生かすも殺すも貴方立ち次第なので私は何も言いませんが出来れば男の人はＲ－１８規制が出る事をしていいですよ！と言うか私がみたいです！」

ハゥ！

……最後の邪神の発言で周りの温度がすっごく下がったがその事を気にしていない邪神は、

「……シリアスが続かないですけど、話を続けるです。これからは「原作」が意味をなさない「貴方達の物語」の始まりです、「憤怒」さん「色欲」さん「嫉妬」さん「絶望」さんはこれまで通り過ごしていれば自ずと「原作」をかき乱してくれるはずです！そして転生者となる「怠惰」さん「傲慢」さん「暴食」さん「強欲」さんはどんなに「原作」から逃れようとしても自ずと「物語」は貴方達を舞台に上げるのでそのつもりでいてくださいね。それじゃあ、カードを額に当てたらそれぞれの技能、「罪」、「武器」を確認したらそれぞれの世界で目覚めてくださいね！」

そう言われて八人の存在はそれぞれ額にカードをつけるとその場から消えるように居なくなっていった……

「絶望」目線

眼が覚めると何時の間にか慣れてしまった天井が見えた。

（あぁ、戻ってきたのか）

俺が体を起こすとベットと言えない薄汚れた布の中からカードが落ちたそれを見た時あの夢が本当なのだと再確認されてしまった。俺はカードを拾い上げるとそのカードにはいくつもの武器が体に刺さっている人の姿をした復讐鬼が描かれていた。俺はもうあの世界に関わる気は無かっただが頭に流れてくる「並行世界の俺」からの情報を見てその考えをやめた。俺が近い将来「ボンゴレ」に戻されるという未来を……。それこそごめんだ、俺を「無実」この牢獄に……入れたボンゴレに戻ってたまるか。俺は絶対にここから出ていく、そう人を殺してでも。その決意が固まると同時に牢屋に復讐者（ヴィンディチェ）が現れた。

「今日も戦ってもらう。良いな、「沢田綱吉」」

「……あぁ」

復讐者はそれだけを言うとさっさとこの牢から出ていった。今居るのは復讐者の牢獄で唯一殺し合いが許された牢獄「地獄の楽園」。ここを出る方法はただ一つ、２００人のＳ級マフィア犯罪者達を殺し、復讐者と戦って倒す事ただそれだけ。脱獄とある一定の時間を除きこの牢獄内では殺しや性犯罪（この牢獄には女達もいる）など全てが許される。俺は昨日まで仲間に裏切られた事や家族に捨てられた事に絶望していて戦っても殺しはしなかった。でもそれも今日までだ！俺は「力」を手に入れた！この「力」で俺は俺の明日を手に入れる！！二度とあのボンゴレに縛られてたまるものか！俺はアヴェンジャー、復讐者だ！俺は必ずボンゴレに復讐して見せる。

これが俺の、沢田綱吉の、「絶望」のアヴェンジャーの物語の始まりだ！

それから二ヶ月後、最後の善意?で骸を釈放する代わりその条件が厳しくなったにも拘らず沢田綱吉は復讐者の牢獄から釈放された。

目線ｅｎｄ

「傲慢」目線

私が目覚めたのは燃える街の中だった。

目の前で殺された両親の燃焼死体。

それに縋り付くようにして泣く妹。

その妹を嘲笑うかのように笑う「悪魔」たち。

それを見た私の心の奥底に眠っていた記憶が蘇る。

大事な妹を犯されるところ、妹に注射を打ち精神的に壊れさせるところ

そして屋上で今まさに飛び降りようとして私に「ごめんねお兄ち

ゃん」と言って視界から消える妹の涙を流しながらの笑顔。

その記憶が蘇った瞬間私はここに居る全ての「悪魔」を殺した。

誰一人として逃げられないように結界を張り虐殺していった。

喉を斬り突き刺し爆破し、頭を潰し切断し突き刺し、体を切断し刺し潰し燃やし凍死させ感電死させ毒殺しありとあらゆる殺し方で「悪魔」を殺していった。気がつく辺りに居た悪魔たちは殆ど死んでしまった。居るのは妹と、その妹は今殺されようとしている「悪魔」数人だけだった。

妹は「悪魔」を殺すと私に抱きついて泣いた、両親が死んだのを受け入れたくないように泣いた妹は死体に声か小さくなると寝てしまった。

これが私の、赤屍　アキラの、「傲慢」もアサシンの始まりです

その後、私達は仲介者と出会い「運び屋」として物語に参加する事になる。だがそれは少し後の話。

目線ｅｎｄ

「嫉妬」目線

僕が目を覚ましたのは深夜の病院だった。

カレンダーを見ると12月になっていることから僕が襲われてから二ヶ月は立っているようだ。

僕はだるい体を起き上げると声が聞こえた。その声は周りから聞こえるのではなく僕の頭に直接響くように聞こえた。

『イ・・・キ、タイ』

その声を聞いた僕は、

（あぁ、物語が始まるのか）

と、心の中で思うとその声に話しかけた。

「生きたいの？」

『イキ、タ・イ。シ・ニ、タク……ナイ。キ、エタ…クナ・イ』

きっと僕は今からこの存在に残酷な事をするだろう。それは二択の選択、しかしそれはその存在にとって命よりも重い選択。

「なら契約をしてない？」

『ケイ・ヤク……？』

「そう、君がどんな存在か知らないし、知る気は無いけど。永遠に僕と一緒に居てくれるのなら僕は君に僕の肉体をあげるよ」

それは契約、そのまま消えたいのなら消えれば良い。だが消えたくないのなら契約をして僕と永遠に一緒に居る契約。この声の存在が一体どんな存在かは知らないけど僕と一緒に居てくれるのならどんな存在だろうと構わない。僕は今そう思っている。

『一緒ニ……居テク、レル？』

「うん、僕は裏切らない限り君と一緒に居てあげる」

『……ケイヤクスル』

「なら確認のためもう一度聞くよ、僕と契約を結ぶ？」

『ムスブ！』

そう声が言うと僕が乗っているベッドに各頂点に小さな円が回転している正三角形魔法陣が現れ、僕は「彼女」の前に召喚された。

これが僕の、天劉　鳴海の、「嫉妬」のバーサーカーの物語の始まり

その後僕は第一級捜索指定最上級「ロストロギア」、「夜天の書」と対となる「宵闇の書」の所有者となり次元犯罪組織「ロスト・ヘ

イブン」の頭首となった。

目線ｅｎｄ

「暴食」目線

俺が目を覚ましたのは、媒体液の中だった。何故そんなモノの中に入っているか理解できない俺は思いっきり媒体液を覆うガラスを殴ると外に出れた。殺風景な部屋の中で服を見つけたのでそれを着る事にした。

（……ん？この服は……）

「目覚めたようだな」

考えていると何時の間にか部屋の中に真っ黒い服を着た誰かが入っていた。

「あんた誰だ？」

「……私の名は「造物主（ライフメーカー）」、貴様を作ったモノだ」

「造物主？（ってことはネギまかよ、ラッキー！俺、ネギのこと

嫌いだったからすっごく嬉しいぜ）」

「貴様はアーウェルンクスシリーズの試作品、闇のアーウェルンクスよ。貴様に一番目の名を与えよう」

「……はぁ？」

「それでは一番目……「勝手に名前をつけるな！！」ブファ！？」

俺が思いっきり造物主を蹴りを入れると壁を何枚も突き抜けて倒れた。まさか一番目なんて……いや、なんか言い方はかっこいいけどなんか嫌だ。良し、新しい名前を考えよう！と考えていると、

「……リライト」

「……んぁ？」

後ろから造物主の声が聞こえ振り向くと光線を胸に喰らい吹き飛んでしまった。

「馬鹿め、私に逆らわなければ生きていられたものを」

造物主がそんな事を言って背を向けたその時、

「イテェだろうが！！」

「グファ！？」

また、一番目「その名で呼ぶな！！」……が造物主を殴り飛ばした。

「バ、バカな!?何故リライトが効かない!?」

「知るか!!テメェ覚悟しろよ!!一瞬心臓が止まるとこだったんだからな!!」

それからは何故か一方的な殴り合いとなった、造物主の魔法が一切効かず逆に一ば「その名で呼ぶな!!」の力が強くなっていったからだ。

これが俺の、ラディウス＝アーウェルンクスの、「暴食」のライダーの物語の始まりだ

その後、ここが２４００年も前の魔法世界だとタコ殴りにした造物主から聞いたのは少し後のことだった。

目線ｅｎｄ

「強欲」目線

僕が目覚めたのはベビーベッドの中だった。

それから二年立てるようになった僕は普通の転生者なら筋トレとかするのだろうが僕は魔力と気のコントロールを重点的にすることにした。なんせ僕の技能（スキル）には弱体と言う技能がありどんなに鍛えても意味をなさないアンチ機能があるからだ。それに肉体強化魔法ができないようにしている。その代わり魔力ＥＸ（世界樹を２０年間発光できるだけの魔力）を手に入れている。故に僕は今も一生懸命魔力と気をコントロールをしている。

……僕の詳しい技能や「罪」の力はまた今度説明するとして、遂に五歳で「武器」の一つが届き……いや、現れてくれました。なんと最初の「武器」とは輝背男（カガセオ）さん（女の子）です！

「……」（ニコニコニコニコ）

……何しているんですか、邪神！と地面に手をついている僕の隣でカガセオ（両親から優華と言う名前を与えられた）さんがニコニコと笑顔で立っています。なんでも夫婦仲良く買い物に出た帰りに家の玄関前で、

「……」『拾って下さい』

と書かれたボードを持って段ボールの中に入っていたカガセオさんを発見、カガセオさんに近付いて理由を聞こうとしたら白いクシャクシャになった封筒を渡された。中にはカガセオさんが生まれながら喉に異常がありそんな子供を育てずに捨ててしまうことを決めたのでお金と一緒に捨てると行った文章が書かれていたらしく、その手紙を見せた後段ボールの中にあったらしいトランクに総額二億円が入っていたらしい、それを見た両親がこの子は私達（おもに僕）が育てる！！といい直ぐにカガセオさんを養子にしてカガセオさんの銀行口座を作りその中にトランクの二億円を入れてカガセオさん

に持たせた。ウチの両親はお金ではなく理不尽な理由で捨てられた事に怒り、トランクの二億円はカガセオさん（以降優華と言うようにします）の将来のために取っておくことにしたらしい。

「……？「大丈夫ですか？」」

「ん？何でもないよ、優華」

いつまでも落ち込んでいる僕を心配してか、優華は少し泣きそうな顔をして僕に聞いてきたため何でもない事を告げた。カガセオさんと呼ぶと無言の圧力を優華が出すため仕方なく優華と言う事にした。それとなんで僕が優華の言葉が分かるのかと言うと……これは本編で見えてね。

「それじゃ、ご飯を作ろうか」

「……！「うん！」」（ニコニコニコ）

これが僕の、赤峰　透夜の、「強欲」のキャスターの物語の始まり

その後、なんとか（五歳にしては凄く美味そう）出来たご飯を両親と一緒に食べる事となり、7年後「麻帆良学園」に入学することとなるがそれはかなり後の話。

目線ｅｎｄ

「怠惰」目線

俺が目覚めたのは大きい白い虎（ホワイトタイガー）の腹に仰向けで倒れているところだった。

俺が目覚めてから１０年只何もなかった。しいて言うのなら俺が盗賊達やこの森を領地にしようと狙っている連中から「白虎の武神」と呼ばれているぐらいだ。ここの兄弟や家族達の毛皮がとてもよく売れるため盗賊が俺の兄弟と家族に手を出そうとしてその盗賊を皆殺しにしたのが始まりだった。それからというもの盗賊が群れをなして襲ってきたり、噂を聞きつけた馬鹿な領主が軍を引き連れてここを自分の領地にするとか言っていたが問答無用で殺した。俺ら「獣」に武器入らない、爪や牙で喉や腕を引き裂いたり咬みついたりすればいいのだから、だが偶に「武人」を見つける事があるその時には俺は唯一「獣」から「人」に……「武人」に変われる。兄弟や家族はその事を知って俺についてきてくれる、俺はこの群れの王であり、一人の武将でしかない。そんなある日だった彼女が……雪蓮が現れたのは。彼女は一人でこの森に入り俺と戦えと言った。俺はそれを了承した、理由はわからない只、彼女と戦いたいと武人の俺が叫んでいた。

勝負は俺の圧勝だったが、結果は俺の負けだった。

俺は雪蓮の心に負けた。雪蓮は呉と救うために力が欲しい……い

や、手に入れる思いでここに来ていた。それは呉の民のためならばその命すら捧げようとする雪蓮がとても美しいと思えた。本能と理性二つを持ちながらその二つを顔も知らない国の民のために全て捧げている雪蓮に惚れてしまった。俺は自ら雪蓮の配下に下った。兄弟や家族もその事を了承し家族の半分が一緒に暮らせるようにすることを条件に俺を雪蓮の配下にしても良いと言われ雪蓮は了承した。そして俺は今兄弟の一人と共に雪蓮の玉座の前に居る俺に名と字、そして真名を授けてくれるらしい。

これが俺の、性は孫　名は白　字は候周　真名は羅刹の、「怠惰」のバーサーカーの物語の始まり

この後の飲み会で雪蓮に襲われそうになり、なんとか逃げ切れた。

目線ｅｎｄ

「憤怒」目線

私の目覚めは化け物を虐殺している白い獣の後ろだった。

私はほんの小さな村で婦警をしていた、同じ警察学校を卒業したセラス・ヴィクトリアと普通の平凡な毎日を送っていたのだがある日を境に一転してしまう後のチェダース村事件と呼ばれる事件である。

白き獣は周りに居た全ての化け物を殺しつくすと人の姿に変わった。襟を立てた黄色の熱帯用オーバーコートに規格帽を被った兵士、それがその化け物の人としての姿だった。化け物は私の方に近付くと化け物を殺しつくした手を大きく振りかぶり私を殴ろうとしたらしいが私はその拳を避けて最後の抵抗をするかのように咬みついた。もし、私の奥歯の一つが銀歯で無かったら私は生きていられなかったのかもしれない。咬みつけた私を驚いた顔で見る男を放置し私は必死に咬みついた。

それは生きたいと言う願望から、それはあの化け物を殺すと言う自分の体から溢れる怒りから

そして私は銀歯のところから流れる血に気付かず口の中にあった唾と一緒に呑みこんでしまった。

その直後、私は「人間」でありながら「人外」になった。唾を飲み込んで数秒した時、激痛が体を走り、引き千切られた右腕から巨大な獣の……いや、目の前の化け物と同じ腕が生えてきた。目の前に居た化け物は腕が生える直前に後ろに下がり銃を構えた。だが私には激痛とさっきまで化け物たち相手に拳銃と鉄パイプだけで戦っていた私の体力が限界を振り切ってしまったようでもうさっきみたいに咬みつく力すら残っていない。だが、その化け物が拳銃の引き金を引く事は無かった。

「いやいや、素晴らしいじゃないか」

化け物が後ろに居る存在に気付きその道を開けるように退くと眼

鏡をかけた肥満体の男でいやらしい目と頬を少し上げたいやらしい笑い方した男を見たところで私は気を失った。

これが私の、アルミナ＝フェイバルクの、「憤怒」のランサーの物語の始まりだった

そして私は唯一少佐に対抗でき、自分の気分で他の吸血鬼（兵士）達を殺せ、アーカード戦の切り札の一枚としてミレニアムに属す事になる。

目線ｅｎｄ

「色欲」目線

俺の目覚めはほんの数日前に引っ越したばかりの部屋でした。

それから一年後。俺はいつものように目覚め、自分の机の上に夢で見たカードが置かれているのを手に取ってみた。あの夢を見た日の午後、買い物に出ていた俺がモデルの勧誘を受けてから俺の生活が変わり、今では俳優や芸能活動もするほどに有名になっていた、そのせいで振り分け試験に参加できませんでしたが……。俺はカ

ードを制服の上着に入れ服を着替えた、着替え終わった俺は俺と兄さんの朝ご飯を作るためにリビングに行くと、

「おはよう、夕兎（ゆうと）」

「……おはよう、アキ兄さん」

何故かいつも俺よりも早く起きて朝食を作っているアキ兄さん……本名「吉井　明久」の姿がある。いつも六時に起きてるんだけど何故かアキ兄さんの方が早い。

「ご飯出来たから並べてくれる？」

「……うん」

俺は明久兄さんが作ってくれた料理をテーブルに置き、ご飯を食べる用意をする。今日から新学期なのかいつも以上に気合が入っている料理を並べているとご飯とお味噌汁を持ってアキ兄さんがテーブルに来て朝食を食べ始めた。朝食を食べているとアキ兄さんが話しかけてきた。

「今日から二年生だけど、僕やっていけるかな？」

「大丈夫、アキ兄さんと俺ならFクラスでもやっていけるよ。それに姫路さんもFクラスなんでしょう？」

「……うん、そうだね。それと夕兎、やっぱり自分の事「俺」って言うより「僕」の方が良いと思うよ？」

「……アキ兄さん、私に変えてもいいんだよ？」

「ごめんなさい！」

俺とアキ兄さんは双子なのだがあまりに似ていない。俺は両親や玲姉さん曰く、玲姉さんに瓜二つなのだ、男だけど。そのせいで俺の性別は一部の人達からは「秀吉」にされている。朝食を食べ終わると俺と兄さんは皿洗いをして学校に行く準備を終えた。

「さてと、学校に行きますか」

「そうだね」

そして俺とアキ兄さんはマンションを出て文月学園に向かう。

これが僕の、吉井　夕兎の、「色欲」のアーチャーの物語の始まりです。

まさか、振り分け試験を途中退席したアキ兄さんを回復試験を行わずに試験召喚戦争に出そうとするのは予想外でした。

目線ｅｎｄ

？？？目線

もしかしたらある、しかしもしかしたらない空間に二人の存在がテーブルの椅子に座っていた、その存在の一人は、

「あはは！遂に始まるんだ！！」

『……』

あの邪神だった、その反対の席には白いローブに白い仮面をかぶった存在が邪神の様子をじっと見ていた。

「世界が乱れ、壊れ、変わっていく。それを見るのはやっぱり良いモノですよね？「顔の無い神（ノーフェイス）」」

『……私は彼らに良い事をしたのだろうか？』

男でも女の声でも老人や大人、子供の声とも違う不思議な声がその空間から聞こえた。それは邪神の目の前に座っている神の声であり、世界の、次元空間の声なのだ。

「さぁ？それは彼らが決める事です。それにあなたは彼らの世界に「イレギュラー」を送ったのでしょう？だったら楽しみながら見ましょう、彼らの物語を」

『……そうだな』

これは全ての始まりにして、分離した物語。この先何が起こるのか、それは誰にもわからない。

全ての物語の始まり（後書き）

最初の物語は「強欲」の物語にする予定です。ある程度区切りが良いところまで来たら他の物語の方に行きますが気にしないでください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8453p/

分岐し続ける物語

2011年1月3日20時48分発行